

三三日記

三三堂

特別  
36  
9291  
8

BOOKMAN NOTE BOOK  
SANSEIDO  
KANDA TOKYO





七月一日(火)

晴。暑さ穏し。いよく夏なり。花畑の雑草の茂れを刈。松  
林にたかき炭金虫を駆除す。花畑はイマコラジオラス、ガリヤと  
並りなり。アサイトラ、セシヤスキトナルン。ジニアホソホソ蛇の目草、天人  
菊、ルコ草なども咲いてゐる。夜、妻瓦物木の根のたぐひの掃蕩を終る。俄に  
から上白と思はす。

七月二日(水)

晴。暑し。小菊畑の雑草を抜く。掃内掃除夫の炭取、急水、溪田の三名は  
明日北海道網走に押送されるので、今朝午すぎより船長に入る。かれらと又  
あとに居残る道中も何等か難い感動をもたせざるに驚く。●恰も掃り家に  
赴くに似てたり又同国を往々致し何等深き心的結合を生まなかつた  
を●示す。把爾若。懲役囚の心理の特殊性は我々の判断を超越するもの  
有り。夜、カレト、オアサオ、オールド流る。眠てよく語りた。

七月三日(木)

晴。時々曇る。●昨夜風吹き冷。涼たすもの有り。今朝の暑さは  
昨日の如く強からず。今朝は花畑の雑草抜きをりぬ。日東の漆系掃り部  
作地石武地が口論す。心づらも強かきなり。格闘に至らず。吾用はトト  
を塗ったとか、何とかいと他物もなきこと有り。夜、安ん臥花五掃り  
を故り出し流る。教へぬる多し。

七月四日(金)

晴。学編で働いてゐる石井正義君が肺病の診断下り、監病舎に入るとい  
ふ。昨夜、物毎に燃る元気で地球をせつてゐたの、一年果しく病、瘦弱





甚しかった。しかし吾等は病でないといふついで当人も希絶的に否定しつづけたる、  
同君は学書の裏面に花を在りて作つてあるが、それを中山に挿して花細  
に保護すといふので、今は中山と共に学書に在りてこれを花細に挿入  
せしむるは元氣に在りてあるが、それでも即ち行つてゐる。今は  
教務課長に交渉に ~~相成り~~ 彼を依頼す。運動をせしめたいと思つて  
ゐる。教務課長に面会の約束を合す。鈴木君も両君よりその探査物を  
以贈らる。吾等君は挿の同一つ。及び此際浄机の足文字を記せし條幅の  
あり。絵は一心齋と署名し頗る素人放れしてゐる。鈴木君は思ひ  
ふ流りの書あり。両君とも方に在り。日本的になつてゐるはやはり  
かやうな伝統的藝術を方に付けしことではなからぬを感ず。吾等  
陸軍特務機関、柴橋行利より来信。北京の中に吾等。吾等の標に  
東文君は心余の旧友に面会せりと云ふ。又、倭漢辞書の編纂を  
なす。

七月五日(土)  
晴。暑甚し。夕刻驟雨あり。池田俊彦君も ~~前~~ 鈴木君と何れ  
一二の條幅の少許あり。此に出給するの記念の探査をして呉れり。此際  
作の経緯一書を蘇濃判の紙に記す。世のなべて未知の事と見ゆべきも  
胸筋にあつたいくさの事は、といふ歌あり。文字素直なり。余も亦此品を  
贈答約をなす。宛婦の手紙来り。國語書二巻入を依頼す。池田君  
君に書翰文庫本を以て ~~二~~ 兩卷を預ませたりといふは、吾等探査して  
未すぬ。有んば在りては、いふ文庫本、藤村文庫のスケッチを  
貸与せしに大に面白かつて居る。宇都宮に在りて ~~輕い~~ 地り物也。國語  
書の記述を好む者多し。しかし人性の根本的 ~~素~~ には ~~素~~ には ~~素~~ には ~~素~~  
ものに目を醒める要なし。

七月六日(日)  
晴。昨日曜にて炎暑。久しぶりの休みを此に嬉しき思ふ。教誨は予實に同年  
地味に控へてゐる。此から着守の中、帰還勇士に預しをしてもらふこと  
なり。田村といふ着守が佛印方面の話をした。別に奇けりし内容をし  
てや、此地帯の歴史で、予等が二十餘年前の芝木を在りて創して以  
て預しをする。在りての着守も預す事なつたが、吾等が取済。予は予  
海外放逐の一端をきかせて呉れり。池田君への探査は予探査文に  
尺幅。是則云は語"大徳君は此より可貴也"一語、予の語句  
"死して来れ! 汝の心も吾等世に預し、此の暗き地上にありて愛する  
吾人ならんのみ"一語を伴ひし。

七月七日(月)  
晴。暑甚し。今日は昨日より更に炎暑。午後松蔭に在りて両君の列  
緯あり。出征勇士武庫長久を祈禱す。戦雲漠々、世界に殺伐揃つ。  
我武家に強者の榮譽あり。

七月八日(火)  
晴。暑甚し。中村経一君に手紙書く。何かの職業を就くことを勧め  
す。日君志望の業文学研究は職業の用暇にしかる可とすべし。生活の  
たい中におれと記す。

七月九日(水)  
晴。暑甚し。東地益甚しに在りて、暑甚し。出でたり。予は予  
の ~~内~~ 居りて居りた。近状を一報する。予は、長文の書と思ふこと  
行はくものよし。吾等君が人絹の幅一尺長を尺伍の寸のた



何か書けといふ、古事記神代巻に於て「朝日の直刺す、夕日の照る風、  
よひの文字を書き、人絹は~~ぬ~~軍が滑つて巧く書けなかつた。

七月十日(木)

晴、今日は暑気烈し、花屋の中い武地君は十一時で果てた区全にかけ  
責任点中に消却する。此は九月に在らぬか申し渡しかをい、日君の真面目さ  
を賞つて、月中に消却してやってくれんやうにと元工担者伊藤政一氏に  
依頼した、大伴系知せられた。

七月十一日(金)

豪雨、朝より降り出し夕刻まで降りつゝ、涼気たる大雨なり、農作物の大き  
大に上るし、昨日より刑務所職員の間には悪召が流出す、正午後海老に於いて  
壮り会をりし、技手三名、番字九名、計十二名の大量悪召である、~~所長~~の壮  
り、~~経~~、悪召代表 森元技士の答辯あり、壮り会中いにて悪召を  
思はか深かつ、年九に在りて悪召者あり、番字 森本竜彦君も悪召す、  
日君は太外おのり人、徳女、作周の悪召あり、日君の父君はかつて特等  
十士の持物予教師で余は三郎也。頃その教を受けた、日君は法廷子々なり、  
所従問を祈る、おもしろい自他互に、余の告状まで、略略談をで合せよと  
いふことを記す。

七月十二日(土)

今日はまた大い大雨である。昨日珍らしい道頭をたす、それは構外掃夫八人の予  
人になつて、~~お~~おのり衆佛となつた亡國の墓地を掃除にかけたことである。  
寺は荒川改水路の向ふ側にある久慈山 徳光寺といふ日蓮宗の寺でかなり  
由緒ある寺なり。大きなお籠を掃むもの三組、余は草刈り五本を肩に

責任者 森元技士は 筆一本を握り、名山部長、飯本系田両番字が  
添ひて豪雨の中を去る。刑務所の門を出ると空気がスーと澄んでく  
から不思議なものを、~~森元~~少尉か 出立前に言つてくれな、在るほど  
喧嘩の門を出て 大きく喋り下るかよいと 普通の人衆の立ち列ぶのや  
うにておのり衆男女を足ると不思議な感じかしてくる。平生おのり  
衆部共の姿を見てある同には街頭のどの通行人にも空気が優しさの  
面影化れか感じらる。一旦土手~~に~~に上り、天に流航の方を下つて行つた  
か 船頭かある。この流航は出航者 佐夜、真清等の経営で、流航は  
小舟から出航した 徳女といふ男である。どうやら在るの居たり居たりする  
名山部長の笑面で、流航を止め、~~お~~お大船を回つて行くことに在る。おのり  
小舟を止めたり言つた。荷物を携ひて、おのりはつらうか 道中長けられこれか  
社会に接する 氣分は出るからである。合羽を着て長靴を穿いておのり  
一十四人と見えない。しかし何れか 乞食よりややましな 異様な 風貌で  
おのりも 一か二かをつらしおのり人か 三人も 附添ひておのり人か、月を  
おのり立て、眺める。バスに乗つておのり女か、不審をうにいつまでも眺めてお  
のりか、月に眺る。丁度 土曜日の十二時すぎたおのりで、学校帰りの 少年少女  
にたいさんおのり。やはり 流航とおのり 元氣をたすおのり多し。橋の上で  
おのり 立往生しておのり トラウマも何れか、珍らしいものか、おのり 在る  
した。おのり 香年をたして 着物の裾をまくり上げて、おのり スリッパの 崎を  
おのり 出した 若い女も何れか、物珍し ~~おのり~~おのり 頭は 葛飾の 他人らしい  
おのり 拙い 場末のおのり 女なり。しかし 半纏を着た 男の姿も何れか、  
珍らしい。約 三時十分おのり 在るに、~~おのり~~おのり 墓地に 到着する。おのり 寺の  
境内におのり 在るおのり 東武線の 開通のため、おのり 墓地の 間に 土手が  
おのり でき、電車や 汽車が 其上を 走るに 至つた。墓地は 三百坪ほど  
おのり あり、~~おのり~~おのり 大きな 墓か、二つ 並んで、一つは 亡國之 重と 墓と







年にして見れば頗る有格な存在、大に甘き節あり、然し甘きの中に人び  
解るゝ所あり。此れ大衆の中に人氣ありの故なり。

七月十四日(火)

雨。雨はやいながら梅雨室の中は曇つてゐる。空はせうである。今日は  
は空気の白くして赤い色の体みをついにくり上げて気象となる。教諭  
を以て教諭を節りる月曜編を訂して教諭師地人阿彌地経を随福  
は伴はす。前長、豊松柳、作業課長、戒護課長、同人  
代表等が従者する。教諭は角氏、歐洲博覧会を語つた後、川崎市の  
或る新設勇士の家に訪れ佐藤氏を待たせ居る。今日は一日、川崎市  
の各所を訪問し、午後、佐藤氏の臨書を写す。

七月十六日(水)

依然梅雨の如き天候である。甚しく冷害の気温だ。トマトも茄子  
もきりりと立ち枯れに在るもの多し。畑の中に入りて終らぬ梅雨の  
入れたる。

七月十七日(木)

今日も冷涼なる微雨が降つてゐる。涼しくてよい。在りていたこと  
ない。昨日突如として近衛内閣を辞職す。まことに寂しい水なり。今次  
の大動員たる勢に及ぶといはれ、市民全部は受命の衝撃を  
受てゐる。衡同にこの玉内動員は實に空しく感じ。今日赤羽  
の隊防性対策二日せり。藤瀬や頭眩を訴ふる者多し。また  
法を以て、尾井貴一郎君より書状受取、宇田名氏より信及、鍋山の  
公論材料受取等も完了。

七月十八日(金)

暑。今日は梅雨の如き天候である。甚しく冷害の気温だ。トマトも茄子  
もきりりと立ち枯れに在るもの多し。畑の中に入りて終らぬ梅雨の  
入れたる。今日も冷涼なる微雨が降つてゐる。涼しくてよい。在りていたこと  
ない。昨日突如として近衛内閣を辞職す。まことに寂しい水なり。今次  
の大動員たる勢に及ぶといはれ、市民全部は受命の衝撃を  
受てゐる。衡同にこの玉内動員は實に空しく感じ。今日赤羽  
の隊防性対策二日せり。藤瀬や頭眩を訴ふる者多し。また  
法を以て、尾井貴一郎君より書状受取、宇田名氏より信及、鍋山の  
公論材料受取等も完了。

七月十九日(土)

暑。今日は梅雨の如き天候である。甚しく冷害の気温だ。トマトも茄子  
もきりりと立ち枯れに在るもの多し。畑の中に入りて終らぬ梅雨の  
入れたる。今日も冷涼なる微雨が降つてゐる。涼しくてよい。在りていたこと  
ない。昨日突如として近衛内閣を辞職す。まことに寂しい水なり。今次  
の大動員たる勢に及ぶといはれ、市民全部は受命の衝撃を  
受てゐる。衡同にこの玉内動員は實に空しく感じ。今日赤羽  
の隊防性対策二日せり。藤瀬や頭眩を訴ふる者多し。また  
法を以て、尾井貴一郎君より書状受取、宇田名氏より信及、鍋山の  
公論材料受取等も完了。

七月二十日(日)

雨。今日は梅雨の如き天候である。甚しく冷害の気温だ。トマトも茄子  
もきりりと立ち枯れに在るもの多し。畑の中に入りて終らぬ梅雨の  
入れたる。今日も冷涼なる微雨が降つてゐる。涼しくてよい。在りていたこと  
ない。昨日突如として近衛内閣を辞職す。まことに寂しい水なり。今次  
の大動員たる勢に及ぶといはれ、市民全部は受命の衝撃を  
受てゐる。衡同にこの玉内動員は實に空しく感じ。今日赤羽  
の隊防性対策二日せり。藤瀬や頭眩を訴ふる者多し。また  
法を以て、尾井貴一郎君より書状受取、宇田名氏より信及、鍋山の  
公論材料受取等も完了。



内情を急いせり。

七月二十日(月)

雨やま。冷涼といへ天暗し。内情に於て大動員に上る。急迫と  
在るべきものあり。今朝農場にて一活劇あり。内情の金田平吉が守屋  
孫一を殴打し守屋も擲り返したる力及ばず數々やられた。其因は  
特にならぬ守屋は意氣にして男色女形師であり、金田は好色には  
嫌み深く加ふるに預備要領的である。守屋の最近の行状は金田  
の嫉妬をいふものありたためなりし如し。守屋は擲られた後に即座し  
買込にゆくたし馬をせしも皆々宥めたり。余は中山●牛乳谷兩人に囁いて  
電報局の仲直りをさせぬ。金田は北宮左衛門の主将に於て守屋も大当  
張をも遣に及ばず。但し兩人世顔をほれ上らせ、~~守屋は~~守屋は  
大下でこゝで、金田も眼のふちがなち切れておる。先づ守屋より  
詳しい才の上話をきいてその傍俤を憐れた。彼は農家の一少女が富  
家に女中奉公中に、~~富家主人の友なる富商の~~富商の風を慕して生れたるので、  
つまり私を定である。母は彼を両親に抱して他家に嫁入つた。  
彼の母の両親つまり彼の祖父母は彼を弱きため弱気で而も我  
儀を人間として大きく育つた。梅湖で親役に限つた二年、陰謀して  
間もなく或る農家に養子と奉つた。妻は養母の連れ子であった。彼は  
妻と養父との間に関係があつた推し娘婚の念に駆られた。彼は妻を  
熱愛し妻も亦彼を愛しておたらしい。彼は或る藩園の中で妻と最後の  
一契りをなした後隠れておいた倉口で彼女を刺殺し自分も自殺を計り腹や  
り刀に古やみに刀を突き立てた。半年刑養子に奉つてから七月月で  
あつたこと。八月の刑なり。喧嘩古手り金田は妻の父を刺殺したること  
から殺せりとも也。兩人此に性格に異常なり。久しに松中を治つた

終にむとく奉つておるべき也。

今朝も雨のため農場は休んでおる。午前中農具を修理し、  
柳山潤●養肥を依頼す。

午後農具より葡萄作り讀まきく。昨日は大葡萄中葡萄の系統讀ま  
きいたため今日は苗木、移植、本鉢への移植について聞く。主事  
何所をノートす。

七月二十二日(火)

物語り大雷雨とある。朝来曇りを覆す如く降る。夕刻より暴風意味  
となり大雨凄しくしおき草木の揺るは甚し。農場は休んでおる。  
障外掃夫の部屋にておじやを作りて食ふに即馳走に在る。若中  
無期因車路と語る。彼は京都の人、二十才にして強盗殺人を奉ず。  
ゆりある良家の出でぬれし。彼は頗る愉快し将来の希望なく絶望感  
にとらはれておる。二十才のおも、二十才の若い才、この不徳の世話を  
すれば神徳急弱に陥るのほむりたる。希望をもちて落すこと、此の世  
治に力めて良かるに思ふべきこと。此か味民族の一負たるを自覚し自  
分の墮落は自民族の損失たるを考ふこと。良友をもつて世をいひ  
きかせた。

七月二十三日(水)

二日間近く降りつた大雨が漸く晴れて太陽が久しほりに照りつけられ、  
しかも地上は湧き出た水とある。内濠の水は地上にのぼり工場の下に  
まを溢れる。刑務所附近は昭和十三年の大出水より一層ひどく、  
軒並に浸水してゐる。放水時の土車が切れるをうかす騒がれ也。関東一帯  
津波の出水光景をさしたる如し。中山は田島善男と連絡して終に陰謀















八月一日(金)

曇。雨上る。神戸振南商會立川他尾といふ人より是より来り。是は兩軍のこたなる人か。仲野中務補に面會す。余の力上のことなり。疑ふれば至秋十二年余、持向ハハ多しとす。忠家の刑務局長にして人を畜たせし物なり。しかも十を左右として一向長松也の氣勢をなし。余の一才は鶴毛の如く軽し。されども忠家の赤心に深愛をせし能はず。教務として小時間、角及ハ胡愈兩校海師に會ひ農協、瑞夫大岩正部及ハハ二校、掃山山下長夫の作にうきをせし。大岩比十(持向)八歳にして入獄し今三十歳、無期懲役なり。少年にして刑に觸れ其妻を獄内に閉居ししといひ出らぬか分るる在り。山下ハ今六十三歳、大正八年の米騒動の際に守鏡を打ち鳴らせし原に墮つてあるなり。宗仰には老農あり。大坂の街談に孫あり。老の刻、(出)て追れる松、跡工備せし。也息子(野人)山下大岩共に在りて連かに銀板して中つ頂けまいかとい口を利にせしあり。

八月三日(土)

曇。朝は雨なり。冷涼なり。農作物の徹底思ひせられ。花師上より来書、翁師上が先月以來脚氣にて頗る色落ちし中、抱師も小食より常病しての着病なり。今は小東を以て熱病を病む。心掛りのことなり。寺本教海師農場に來りて大光三郎に逢ひて乍らく連かは七條也といひしと語らる。大光表にて余に告ぐ。花畑の乾草退治をや。中山は執筆を振かざる男なり。かかて放漫筆を社会に持ち出さしんせぬ(害女)し。石飛左去小菊の珍しい作り方、若本熊去最新園藝を論ず。今は花作りの時期にあらずといひて花作りの作るを此の月には表裏に注意せしむる。

八月三日(日)

雨一日晴なり。久しりの農業日である。甚を休の意をせし。農協の月四日ハ十五名あり、これだけの人数に集してを此に何かはし氣腹れかた。人からいふん難れはこととて心おちつるものあり。教海は巧しく自任せられたる楠下也。楠下と親下とハ音の似通ふたため、輕い笑聲がこぼれ、お話ハ母を主題とす。母のことと云つてを此に無難なり。いふ人言はた余をさく沈年或は年の氣かする。たし小費にをられうちに近、近とせし。今日而ふきことあり。八月最初の日曜農業日は同人代表、選挙ありて例としてあり。農協からは大塚安政を立てるはつてあり。先日に昨日の選挙からハハ在り。午の一二級者の集會のたし、三田村に即來りて彼が控房を現せし。乃南會側から代表候補者工推されて當選確言ある。たし田の善り等が反對しておちをせし語つた。これより及しはらくして石田三東と田の善りの意志なりといひ三田村は斯野白老なり。彼れを野白老と認め之に代表候補の運動を許すかハハ刑務所の終末に不都合なり。持向先一月之に反對しては外何とのことなり。余ハ三田村を野白老と思はす。故に僅かにせしとく知る。然し此の理由で七日動作を断りたり。1)持向同親に關するは何事にもせし安に申出つたりに賛成せし。2)此か比同親について無言也、純信也、無確信にいかた事りに在るはかハ牧師東海、3)同人のこたに及しは(悪口をいふ)はくことを場子。4)田の善り中尾も茶有者なり、田中ハハは余を傷かたかハ田の善りの所なり、かハ同親もこたに直に余を引出し利用せんとす。然るに早稲なり。4)田の善り東の選挙制度を旧体制かりして改革を要求すといふ。而も彼ハ三田村が優勢とせしは、この現在の代表野井(彼の腹心あり)を候補者に立てるなり。此野井は昨日の日記にあり。5)田の善り所、妙野(内親)について容疑者(私情)



の一人を、三田村の土をうかすつまいか我々大塚を建てるといふ事になりし  
又大塚の復讐すこと疑ひなく我々にはこれによりて又も一人の事。  
三田村はかたの使ひ走り人の彼を脱せず、三田村の区画の恐れを為す。  
今口は折返り後漢語詠集の略書につて、

八月二日(月)

午前。ふすき弥永着守長が余及び中山を北原に招く。招きも列席す。弥永  
氏曰く代表選考は延期延期すやう成復理長に申入れたり。~~三田村~~  
~~三田村の三候補は~~三田村の三候補は三田村で  
あつた。田島氏も中山の賛き付かしと顕著なり。三田村の三候補は  
はきよくしてきて氣もせし。余等帰りかたは三田村来て弥永氏に  
百金を求む。弥永氏の態度目に見えて冷淡であつた。行くちりて  
三田村市場にきて余り~~三田村~~の百金を求め弥永氏より中山の代表  
三候補には反対して(中山)を選ばせたりとすもそれと認めおし言は  
せられたと語る。流石の心算強令もいとし、情急~~三田村~~は百金を  
在り。~~三田村~~とらしくおしりて帰す。余等然る最末國環とて  
を語る。

八月五日(火)

午前。川崎組の整理と着手す。各枝の一角を譲りて他は切り去る。今口  
大塚物をほんかためなり。今日系争の出来事あり。余等川崎組  
に御座るとき榊内掃夫が松地銀しに内衆の如く、途を現(屋敷と松地)  
~~三田村~~はし胡瓜=糸を出して之を反対の垣根に立てる  
~~三田村~~は三田場の右に流してくれと云つた。余  
は困つた事を言ふと思つたか断つては腹痛発の如く足が痛んで

三田通りにしてやつた。然るにこれに之等の島守が居たので半時間おす  
して一切家に判別し余は太腹を食ひたり。朝工徳司に附せて勤勞  
すやこれに何時は何時となく気が減入つた。其後

八月八日(水)

午前。はじめて夏らしき暑さなり。今日は大の暑傷下。朝の3時前後  
約十五本の移植をなす。それより着いて押草して約十本を  
露地に移植した。更にかつ細に肥料を施す。午後二時頃、  
弥永着守長より呼ばれしなり。北原に招けり成復理長と醫務課長か  
り着し居るも。談、松地銀に能く。余は同人代表選考制につて  
の意見を述べた。是に妙極といふ茶を氷で冷やせしものを飲む。  
大に巧し。何時か市場に帰つて川崎組の三田支柱を立てしやう。  
川崎組の整理つては麦尾君大に授けしめられた。

八月二日(木)

午前。13日事件あり。朝、松本原若(諱名を大塚党といふ)が井戸端で着守川  
島を~~三田村~~とて湯をいれ打つて掛らんす勢ひを云した場所にか合せ、とりて  
取り纏めて二人を引寄せ、松本を榊内の都立につれてきて聞いてみると、一昨日  
の長崎の胡瓜事件と関係してゐる。すなはち川崎組の事件を憤慨し  
陽に口に出さずして可なり。継子いじめを昨日飲やつたといふのである。一昨日  
胡瓜事件には余も関係者であつて川崎組と榊内とが同じ~~三田村~~かあつた下  
難儀大塚、花尾中山をして川崎組に告らしめ、結局榊内が井戸端の事件に  
つては川崎組に謝罪し川崎組は従ふ通り榊内掃夫の面倒をみるといふ  
話し合ふになつた。然るに川崎組は直ちに可を部長島並平部員に上申  
し松本を最前に変更しめられた。島並部長は余に之を~~三田村~~















八月十五日(土)

晴。教室の窓から... 真夏の日差しである。午すきには草木も萎れんばかりである。~~午前十一時~~豚一頭を殺すを完結する。豚外の屠殺場からい若い者の屠夫=白末。屠豚係りの系が次第で豚一頭を這い出す。豚は北豚の形に似ているかと思つて、口くついてく。屠畜の形にくまきでけり成つて逃げ出さるとすのを三人がかりで引入れ奇声を発して殺すのをヒツクリと一人は北豚=白末、一人は白末=白末を振り、一人は首を押しつけサツと~~サツ~~薙刀で頸筋を切ると血がドクドク流れ出る。三分で喉も動かなくして仕舞ふ。屠夫は豚の毛を脱いで腹を、口から肛門へ一直線に直ち割り臍物を次から次へと取り出す。屠豚の係を何かの妙案かして牛屋の番人が出てゆく。屠夫は皮と肉との間に上るに薙刀を入れてサツとサツと肉に割いてゆく。首を切り皮は屠夫の系がサツと一薙刀入れてかき取りの内をよけて早くハツリに投げてゆく。これは屠場、四人の~~屠場~~13と名づけた不文律である。~~屠場~~屠場殺すは以上で終つた。午すき又一件が起つた。午すき中にして豚肉で、屠畜係に豚汁を振舞ふべく屠殺の屠夫の内蔵に玉葱と馬鈴薯を挿入した。その屠刀の漆原(屠畜の定期目)のいものをやる必要かねとて屠畜係に玉葱と馬鈴薯少しをよせた。大塚川流石に喧嘩せよ、巧みに試す突を内蔵の外に容に定例してあいた。内蔵に付する屠畜係に誘いた。この氣は屠畜内蔵をくらぬ氣を上にかきす程である。今も赤内蔵の容に對する反感をもつた。かれらは耕作物を食に喰食してゐる。その犯行は直時目に余る。これには泥持の牛馬各が食害地の張つてきて皆をその方へ引き入れ、畜産家の漆原も食害地の喰食取付である。担当屠畜の責任であること等が原因である。二二天の玉葱と~~馬鈴薯~~馬鈴薯に漬

つるす少尉君の鈴木の花か、これの花を一羽に立て口腹の徳を完た(てあつた)は、天しいことである。

八月十七日(日)

晴。今日は頗る暑い。風がなくてひくむしむしする。午三時過ぎのて宛業。教海は吉布氏、他力本類について話し、然し心を悲しむて受取、東宗教徒の徳を宣傳する。午すきは豚肉三百五十円と、午すき、石山峠に籠れる豚を獲へ、信長をくさした。東宗の信長は信長と有ると田の色を裏にて攻撃する。然し市民の美徳として、信長の信長はそれによつて寸毫も減らぬ。午すき一級者の集會で新聞の閲覧あり、猪の屠畜、記すにヒトイの屠畜影しく記載せられてゐる。うかホドらまの放逐や下らぬ、放逐の放逐あり。非俗術担をもの左り、屠畜下の緊張味を缺く。夕刻は田舎三葉にて監視窓から物をとる。弾に凝りて本を捲きおいては意になつてゐる。この男もオウホ42=ストで、時給的に右翼に適合した部隊の人間で、弾は右翼へ入り、左に、右翼は政治綱領もたが、市民大衆への感化なし、然しての心持は、屠畜からで、屠畜できる。右翼へ適合し、その中へ入れば左翼の連中は、屠畜心きぬ、屠畜もなし。右翼男、屠畜、中野経一、等、の、子、紀、書、く。

八月十八日(月)

晴。強烈の暑氣あり。刈り刈り畑を整理す。枝を剪定し支柱を立つ。支村と並べて結ぶに、木架格の葉を~~用~~小さく割きて用ぬ。又猪頭に液肥を食へ、さきに~~木架~~木架の液肥を~~用~~用ぬ。屠畜の







の拙書既政界と内閣の拙者川名政元と入小伏リとナリ。  
川名氏は松本不<sup>レ</sup>忍との喧嘩の右手であり且つ内閣の山鹿物  
遣費跋扈の責任者也。此男は柔和では動心なく白人  
の標榜をして化子とせせせと下<sup>レ</sup>から七程ともはるを利  
用して急げ放<sup>レ</sup>野<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>である。

八月廿二日(日)

晴。菊の争入れを引ふ。北会お僕部と紛<sup>レ</sup>接あり。あすの2姉妹  
孝若をきたり。林島雄の西御陸憲示一巻を守形形一に貸したと云  
こんをるふい<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>読<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ある。滝み<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>  
て<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>きた<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た。此男少年の如く無邪気  
なり。乳牛先日より胃腸を害してゐたので乳を食ら<sup>レ</sup>ず<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>。  
す<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>快<sup>レ</sup>した<sup>レ</sup>ので<sup>レ</sup>昨日より<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>なる。元<sup>レ</sup>工<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>に  
田<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>乳<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>飲<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>た。毒<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>す。拙者氏も<sup>レ</sup>飲<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>す。

八月廿五日(月)

晴。午<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>旗<sup>レ</sup>掲<sup>レ</sup>揚<sup>レ</sup>式<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>際<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>睡<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>あり。  
日<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>刑<sup>レ</sup>務<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>赴<sup>レ</sup>任<sup>レ</sup>す。い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>罪<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>  
健康<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>祈<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>れた。此人は人格丹精、長老の  
風あり。近來の名刑務局長であつた。故任は岡部といふ人、刑務  
中の最長老なりといふ。大坂刑務所より来たなり。大塚安<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>君<sup>レ</sup>か  
栄<sup>レ</sup>根<sup>レ</sup>謙<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>標<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>策<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>務<sup>レ</sup>務<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>知  
常<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>招<sup>レ</sup>尤<sup>レ</sup>、故<sup>レ</sup>君<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>直<sup>レ</sup>要<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>、あ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>、男<sup>レ</sup>澤<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>氣  
鏡<sup>レ</sup>野<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>赴<sup>レ</sup>任<sup>レ</sup>す。拙<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>君<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>赴<sup>レ</sup>任<sup>レ</sup>す。

如内紙に詳説す。

八月廿二日(日)

晴。菊の争入れを引ふ。直<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>尾<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>ら  
して<sup>レ</sup>ある。若<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>反<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>工<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>ある。~~拙~~監獄政  
治家<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>であ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>か。彼<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>拙<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>め  
て<sup>レ</sup>ある。弱<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>對<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>強<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ふ。石<sup>レ</sup>脚<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>洲<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>詩<sup>レ</sup>に  
我<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>片<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>、餘<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>雪<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>あり。雪<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>潔<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>といふも、は  
確<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ある。監獄<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>それ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>詠<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>た。~~拙~~  
拙<sup>レ</sup>、河<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>齋<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>く、此人は情<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>濁<sup>レ</sup>証<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>復<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>た。好<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>  
~~河~~河<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>齋<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>内、醫師<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>本  
職<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>財<sup>レ</sup>産<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>した<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>力<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
のかといふ。情<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>操<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>状<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>文  
か<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ので<sup>レ</sup>認め<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ので<sup>レ</sup>ある。好<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>對<sup>レ</sup>する<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>府<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>策<sup>レ</sup>も、好<sup>レ</sup>  
向<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>閣<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>、ぬ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>であ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ない。大<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>命<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>か  
別<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>として<sup>レ</sup>ある。好<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>その<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>勇<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>として<sup>レ</sup>角<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
死<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ある。を<sup>レ</sup>きて<sup>レ</sup>恥<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>れ。

八月廿七日(水)

晴。今日も菊の争入れを引ふ。民<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>經<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>郎<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>あり。民<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>  
は<sup>レ</sup>幼<sup>レ</sup>稚<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>伴<sup>レ</sup>母<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>績<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>す。正<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>として<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>ふ  
他<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>ある。中<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>青<sup>レ</sup>島<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>落<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>  
て<sup>レ</sup>ある。~~拙~~拙<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ある。拙<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>し  
然<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>訓<sup>レ</sup>練<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>獲<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>して  
ある。生<sup>レ</sup>活<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>超<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>統<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>ある。



中村君のモンテニエの影が深し、すなわち寂靜なものである。その  
の結核の意味を述べ、但し思案力に富み、  
流石、尊敬すべき友である。

八月廿九日(木)

晴。朝は霧が深かった。夕方は涼しい風が吹き、暖かい空には三日の晴、  
秋の秋を来てることを感ずる。午前九時、汁煮の唐揚げ、  
全日人を集めて新市長岡都幸氏の訓話あり。市長は昨夜八時半着京し、  
午前九時半訓話をし、これにかなり徹夜してゐる。訓話の内容も今、  
主として市長より、理想主義的で情熱がある。大学を以て、三十年、刑  
にむかへてゐるという。余は一冊の理想を有す。それは法律と犯罪に  
生れしめて社会へお返しおこしてやることである。何れとも、  
理想を理想として、その實現に力あるといふは、  
今日の世に珍らしいことである。他を  
おぼしめし、犯罪も刑務所も社会の  
一部であり、決して世外のことではない。  
よからぬ民族の足地から、  
午前十一時頃、  
三十区以上の判事、  
今日の刑務所を  
の戦争を  
志願あり、  
ある、  
て  
角力に強い。午前  
もらふ。この三人は  
おる。

八月廿九日(金)

晴。午前中、  
羊中、  
といふ。は坊主は一番末の  
最も評判よく、  
生れ、  
して、  
らく、  
●職、  
金の、  
病、  
社会の、  
大、  
刑、  
犯罪、  
刑務所、  
他人の、  
犯罪、



















左の男女職工を集めて会を作り回遊施設を作つてゐるのをにら  
まれのものがた。素らしいものばかり。微塵のものを削減せんと  
する当局の態度に深き悲しみに思ふ。文壇は好む、原在也も  
なきことあり。しがち累か夫の入獄中かせりなきを以て  
おこしたるは終年をこたへんす。

九月九日(水)

夜東雨あり。晴又なる。あつちの次女男と来る。皆々無事の由。  
てその胃腸病合知せりと。余の診治せる「文僧の女」を始か左流  
す。女中末の女大ゆかりあり。民子も休母として奮闘して  
ゐるといふ。あつちの母上十三日忌には親類大くさく集り地十人  
近くになり、山口氏夫妻、花氏夫妻、その他も巴之助、川  
面、松岡、岩崎に帰つたら、月日因にもあつちの奥さんか巴之助  
の由とあつちの女中を授けしてくれた。午の寄の参入の由を  
松岡海右氏「東洋の大業」を流す。肥後県村を急ぐといひは  
後熟、現在追ふ、正義親等輩としてをり、群小政治家を  
断絶してゐる。海洲の夜あつちの区内の地主を叙す。何れ  
を流すと懐然たる女あり。その時海洲の豪族をいひ、あつち  
政治家連か今は口を拭きて形勢を察し、あつちの由あり。  
あつちの本は松岡氏の門下にして市一会務に在り。あつちの  
上村哲三君、案内しくれしもの也。

九月十日(水)

初。温室の奥の物置のなかで、五穀、南米穀のほしもの方を  
眺む。羨ししことあり。

九月十一日(木)

今日も雨あり、一日世田は雨に降らん。風なし。あつち、雨の晴  
れ間あり。作業深長見廻りに来り、何をかく遊んでゐると思ひ  
りつけた。その為め昼飯の及雨か降り出しに拘らず、内装の匠十  
は畑の中で、よりく仕事させられた。雨かたかく激しくなると、  
拘らず、畑を鋤き直してゐる。厚い土を裏の水虫はよく  
なり、腰膝腫れ上る。頗る不愉快なり。刈の「エトルカの壺」  
流す。

九月十二日(金)

雨、北晴。日少し弱し。水中浴。脚部を熱す。あつち、  
の志日あり。持来る。日本精神より足らぬことについて流  
深く、笑ひあり。新聞同工、あつちの親を連載せり  
せりとてその功績をもつてきて見せてくれた。南下教海師に  
提出する書面の下書を作る。

九月十三日(土)

朝霧深し。午後日照りとなりて、暑し。民子より夏休明け  
の休園生活、平田氏より、市品(海洲の由)の授け、あつち、  
あつちより、母を死せること、それ(東洋あり)。あつち、あつち  
にあり(山崎向の由)の由あり、あつち、あつちの由あり、あつち、  
あつち、あつちの由あり。



~~山崎 隆夫~~  
~~山崎 隆夫~~  
~~山崎 隆夫~~

十月十日(金) 野崎宗

長い間日記を休んだ。此間約一ヶ月余。市の刑務所生活にも多少の変化を生じた。九月七日在室のうらの氷の上で毒菌侵入し腫郭腫れ上がったので、九月十六日より病舎に入り丸山土肥両醫師の指導と治療によって全快し二十日に退舎し再び農場に帰った。病舎に在る間には月房の泥持ややくざ者から勇の上話をきき、犯罪者世界の心算にふれ不思議な興味と深い嫌悪を感じた。病舎の看護士には面白い人物がゐた。銀子の伝言、向及米者、大坂の百長若石、同界として在室と共に本夫を殺した森田に即兵衛、楠田の夜つ、長谷川、藤田、杉野や堀野など。

九月二十日鳥の部舎が病舎に乗り余に向つて農場の雑役をせよと云つた。現在雑役をしてゐる大塚が嫌氣かきして(強刑車即ちあるのに中は役所にならぬので)辞任したので余にそのあしをせよといふのである。大塚君とも話し合つた上でそれを承知した。雑役とは農場の事務的な仕事をせよと有教に働かぬがなり(同人の雑役)にまつものか。余は自分の現下の要請たる生力補充を農場に實現してゐるため、個人の荒廃せる精神にいく人でも光明をせよとため、余の距離をせよとため、~~同人の雑役~~ 同人後任の上話を聞き刑期少き人を捕るべく速かに釈放せよとため、目的を達して雑役就任と(教誨所等に送る)承知した。九月二十日これをも同人に告ぐ。告ぐの際 ~~同人の雑役~~ 告げた。(同)

多くの同人は余の雑役就任を喜んだけれど中山の如きは大にふとれた。彼は雑役に在りたい理心かあつたかすかりアチカはのれたので、今に三直接要をあたへてこつたをえつたり、意にまはつて種々策動した。しかしそれは世の常りで何ぞ効果は無い。

雑役の取扱ふ事務は ~~同人の雑役~~ 同心的。一俵に農場、生力 ~~同人の雑役~~ (同)



決して十分養育されては居ない。

十月十二日より防空演習がはじまつた。余の主唱で警備局上り地上の消火訓練を計つた。全堂に先駆した。先が行動したのがつた。既に二回行った。

○  
今日の御常祭は美しい秋の日にあつた。午前十時天皇伊勢御幸を遠征せらるる時刻に我々も後援者から遠征の式を挙げた。その右に岡部部長が完全坦率について演説せられた。これは国民の二十年来の苦境のこととて堂に入らぬものであつた。播磨の終りに際しては際々緊張をいひ先冠の有様近しと叫んだ。

午後陸軍報道部映画記者来て「伊勢進駐」その他の様子を撮す。社説を執筆する。実景に感動す。但し藝術的な構図を欠く。素材を以ては所々力を使いしむ。

夕刻、樺太を柳東刺或人の伝言を以て昨夜近衛内閣を辞職せしむる。恐らく對米交渉失敗のためである。政治の腐敗の若者の臆病、米への媚態、国民への背信、他に憂懐が胸に充つ。

伊東政、現代伊東藩よか。擬て而もなし。此れが伊東の心臓、擬て研究ありぬといへば興味あり。

十月十八日(土) 雨

昨日清風社臨時大会の正三時天皇陛下御祝賀の日である。午前十時正三時御祝賀時刻を期して遠征の式を挙ぐ。そのあとで樺下教海師の清風社に因りての演説あり。

現代伊東藩落了す。此れ播磨上りの瑞をなし。政治腐敗の悲境なり。此れを以て我々心中に記す。

十月十九日(日) 晴

昨日は雨の降つて居たが今日は打つて落つた秋晴の美しい日であつた。秋の虫が来てから看守長や部長が昼食時には個人と月い食事を以てて居る。風が吹いた。今日は鳥山部長が居た。実如白衛内閣瓦解して東條英毅陸軍中將が総閣をこころとつた。新内閣の顔觸れを以てて本能的に乗りかへはなすかか。我々の決意は在るべきである。

十月二十日(月) 晴

この難役の職中忙し。小松葉の部下の整理、日課表の整理、任職の死亡の報告書、夏物と冬物との引換の世話等々。彼一人の役付徳後と居るがし。大佐東条頃までにしやう。樺下教海師に本日にかつていにある三人の非行(樺下、志賀、西本)に對する当局の更迭の軟弱を難す。樺下氏は僕及び此の頁に最も苦心すといふはれた。

十月二十一日(火) 晴

正午に石上及び地上の防火訓練をなす。各立場より見事に集り約二百人。そのあとで木骨を以て焼破りて大塚等と携い、つぎ焼場に捨て行く。昨日樺下教海師は此れを以ての踏債の石を以て短期の約束で貸してくれた。此れを以て地味に居る。地味は知れず有年なり。久しきに後援副隊長の報告をなす。







りんせいの運動すゝめを以て、陽光の足ゆい以上、つて暴れ者の人可故を  
記して又元の也)に在る。しかし彼等の元氣をたし。

又休日の諸報も、お趣用を以て快々として集しませ。雑役の事務も興味なく  
勉て思案の暇暇も足出させ。日記息り勝ちなるは取つてし。幸いに病ひ  
少し息を以て、明治節の佳節期して、~~○~~日記を閉閣す。

十月三日(月)

昨日まで曇り空であったのが、今日になってクナリ晴れ、在道好の日和となつて、  
流石は明治節なりと思ふ。我等明治時代に生長せる者は、今更にこの光榮  
ありし時代への追憶切なるものあり。早八時半より廣場に於て明治節の  
祭式あり。次いで、体育大会開かる。南北各對戦を以て、一占の差で勝し  
くも北會が勝つ。地味は大敗す。しかし綱引、蹴球等は勝利す。夕陽  
沈む頃に終了。千余の團人嬉々として手を拍ち交々様ながら、~~舞~~  
~~舞~~舞でも醒めても、奴隷である彼等は、この世を瞬間にのみ奴隷の  
鎖を忘るゝなり。

十月四日(火)

昨日の翌り日となる。雑役の用務何かと忙し。昨日は十人の、役取被  
者ありし由、その中に北會代表 桐谷も出席した。六十歳歳の老賊南  
の退治を犯さるるを恥おこせり。ついで北會代表、送帯を  
大野空の廣場に於て行ふ。鬼場の大塚五十二点、製材の尾村  
五十八点で大塚が選出。銀沢赤民学校の先生來りて會場  
より送帯し、十人ほかに、中亦作操を教ふ。本日、元工場の  
鬼場の日課表を作製す。久し利の習字する。

十月五日(水)

晴。足痛ややく気分亦よし。十一工場のみは適合する如き標語を  
募集する旨、並んで、島小野の●告知あり。昨日七日締切に於  
て、発表してみら。左に結果にあらす。又兼ねて、橋本教海部  
より、出船の方針を以て、文書にて出せしことなり。故、同業に認  
めて添す。此、秋村、製材生活を以て、東洋史の研究を以てし  
等を記す。金木會次郎、行舟、徳廣、朝、河、戸、氏、の  
古く、新報を以て、見たり、由り、は、日、本、各、道、各、府、各、市、の、在、り、の  
もの、を、●工場に於て、参考して見せり。

十月六日(木)

晴。十一工場のみは適合する如き標語の募集に、應ず。次の如し  
○大地の労働を通じて、日本の更なる  
○我等は神佛を信じ、父母を思ひ、労働を勤め、上下一致、忠貞  
増進の玉策に於て、以て祖國の勝算に貢献せむ。  
○民衆生活を増進の活動は、吾等、鬼防、悪魔、改への、志、を  
奮て、ある  
○奴隷の卑下を去り、生れたる誇りをも、ち、已れ、捨て、報恩  
感謝の心を、こ、け、む  
○足名一取、力下室、從、から、十一工場を、早、此、我、等、の、軍、隊、訓練、と  
、新、河、の、神、即、の、お、に、奮、か、す、燒、夷、強、壯、の、心、を、こ、け、す  
(相、各、出、獄、せ、し、に、つき、北、會、代、表、送、帯、を、大、野、空、工、場、に、こ、け、す、  
鬼、場、の、大、塚、空、吃、當、選、す)  
直、一、餅、一、餅、も、御、給、の、心、を、こ、け、し、更、の、  
直、か、堪、む、を、こ、け、す



十月七日(金)

晴。余は自らを同様に憤し出すこと多し。林房施、而御院区、丸山、教諭、左内平助、山本春三、歌傍の石、本花陸界、石井川、なほ好評を得たり。牧守は以て親生活をしてみ、好書を読む瞬間のみ、精神の自由を得てゐるのかと教ふ。赤城益達君より島本健作、運命の人の著入ありたればこれと追憶せしめんと思ふ。

十一月八日(土)

晴。古鉄回収運動あり、農協より約五十員を出す可銀あり。林本田く近く中山と衝突すかもしれぬと。此か本ことせせぬやうにしておけと云つておく。赤波海を倫理学所十冊、現在、十一月号か題してあつて一覽する。この頃読書大に急へてゐる。これらの書時々読んぬれども、而も余もうも有り。

十一月九日(日)

急雨。教諭は初寛教海師。三毒の論。記心中の三毒を克服せしめて好の東亜新秩序の建設ありは心せしむるを云つた。論に吃り。しかし諫言をこれ容易なるの感なきを述べた。秋の財政立て新法より増徴かけさ節々越後椰子節の中継放逐あり。歌曲学視にして邦系に類する本言をとしての系譜性を長味不在り。又声調の剛直にして口辯を鋭くは朝敵地才の人格の特色なきを述べた。更に樂重日豊の友人かアロアの力を記すを述べた。必語を放逐した。支那人の中二巧いの大感心した。民子及の教師とこれ書て。教師には聖崎健夫、莖葉の作り方を民子に文法文章の比系制中けり記を依頼す。

十一月十日(月)

晴。毒で来る。かなり朗かである。皆々健康である。民子は幼稚園、子、勇子は某寺にこれと遊学の由。出帆の境は鬼村に住み居る位になるべしと心語りおく。

十一月十一日(火)

晴。今更監房衣箱と作る。菊池~~池~~徳林五十度石心掃去のちと捨用して工場倉庫の衣服を換へてやる。此の長はしけられぬれぬれも娘し。橋下教海師より呼出しあり。此の長生此の年記について色々話しあり。あまり早にせよと穿鑿より此は少く撞着かきす。いかに特向の東室の利用せられぬことと話し、おれもそれこれに飽きた。松本君の復札による、現成の年の振替について少し考へて見せぬと見たり。

十一月十二日(水)

晴。松本君北海道へ押送せらるゝ事あり。此人豪胆にして多腕あり、彼人を尻尾と思はぬこと得せたり。惜しむべし。又寺谷宗徳は南洋行り募集に懇じた。探査未定あり。先般来秋田の向け約五十名を押送せる由。徳役団にも時給の反映して教員数りとするに似たり。難題に似たる借借あり。

十一月十三日(木)

晴。凡邦に咽喉痛し。右子、勇、子、高子等所手押来る。右子は尼意のほの字の巧く在り。心折つては傷心の病に似たり。可憐と心おし。勇は大病則回復して在り。



新編の双葉葉録に記しおと多しとか。此婦六十歳なり。  
二兄三姉一妹、此に命を叫んで七人の月夜を思ふは  
長ぶし。不九子不余はいつまでも幼弟を分を脱せざる如し。  
人老いて兄弟仲よく有るといふは真である

十一月十四日(金)  
昨夜から雨が降り出し一昨日から降り降った。久寒の雨であつた。此  
下島もうらやふ。といふしめりむとる能因人等口々に言ふ。  
風邪がち最分有る。

十一月十五日(土)  
巻、北陸北。錦旗十一月号上巻。此物誌は朝野の現下  
生活の真しめを都面をかき取りよく代表してある。偏狭より  
生色あり。書道十一月号上巻。佐久間象山号なり。象山の  
書も亦しも敬服せし。詩は巧し。畫は中上なり。

十一月十六日(日)  
快晴。亦三日ほどして免業。教海は加藤教務長、志賀  
義雄の母の倒れを以て母節を及ぶ。年次の集會にはお断  
なし。ラヂオ放送にて清談田茶屋茶室の小戸石の会を  
あり。久しかりて行録師の略書を存す。

十一月十七日(月)  
快晴なり。頗る暖い。中村純一君及赤井長造君よりお断。  
赤井君は十九日神戸大船の汽船にて上海へ赴き總領事館

の偏説に在り。中村君は五更ら赤井君某に没頭すとか也。  
先般小林杜人君より二巻等龍巻包巻を言入れてくれ。大石御書高  
大巻を~~包~~包して専ら龍巻包巻を借り出すとか也。

十一月十八日(火)  
快晴。小林杜人君に二巻等龍巻包巻の池状現出。  
根、龍巻包巻を論ず。これは近衛不任侯朝野  
を物言して現字手本とせしなり。

十一月十九日(水)  
昨夜雨が降った。朝、霧深く九時頃まで包巻工場内に  
大根や人参の押下が終る。秋田刑務所、伏利務所より限  
八十人送つたが今日五十二人送られた。その中に  
銀井の尻澤也あり。此男は東京でやくざ徳業、一犯なり。  
秋田方にかんかん怒れり。角力取の奇玉もゆく由。

十一月二十日(木)  
朝霧深し。今日も九時頃まで包巻工場内に封鎖さる。豚  
の分給二頭あり。一頭は仔豚十を生子わかれも出来、一頭は  
一死子を生子五頭の生きたのも生んたか何れも弱々しかり。お夫  
は京北茶屋茶室の倒れも、二人の物言のつから現る。此  
二人とも南肥の凶賊なり。いづれも刑務所では異常に激しく苦働  
して囚人待遇も早進の早い。茶室は大正末車から入獄してより、  
今日最悪の地位にあり。巧く釈放期が近づいて急がせして  
(囚人といふ) あり。彼の受持では任職がたくさん死ぬ。この二人も











十一月三十日(日)

是、晴。小雨。晴天のつきすむを思つたら又一つ晴れともしぬ。雨の日や曇りの日かつかう。地上に秋雲漲りからであらう。又東京のやうな年々大都会を作らねばならぬ。居るに高山部を一月と同日に合意を取った。これは合意と云つて既長かきからほしまつた風である。形式に流れさうとせよ。

十二月一日(月)

是、今年も余すは一月とあった。天気も追々強くなってゆく。後防務局長中村成郎氏及び教導長保吉氏尺中、而長官にせり長、右両氏、橋下教海師と共に語る。此時向者いかに語向せしむべきかにつき物と苦心をいふ。而長官に鄭孝賢の「條幅あり、畫馬山岳置け、眼前の八雲、筆力あり、力にして一尺爽快なり。又、小倉刑務所鬼虎増強策なるものを呈しはじむ。

十二月二日(火)

半曇半晴。持来。尾井豊一郎君寄贈の東洋文化大系その他軍書類を差入れてくれぬ。平田熱先生に面会して由、預本同様に備はれぬと。持はる津本都の調査概図に備はれぬらしい。午後四人代表の選考が神前市場で行はれた。九工の(北軍)伊藤氏が最善点で当選、十一工場の中山は二十票ほどの

差で敗れた。昨日の伊藤君が内閣の既相当の感懐を案する言も登した由、伊藤君の間接にも弱ったもの也。

十二月三日(水)

是、~~晴~~ 曇。勇い出雲勉をけがす。

十二月四日(木)

晴。飛本が元工に入り、幸か内閣に入った。梳順湯の炭山に行きこいた。彼は工儀を後継川といふ頗る強い。虫林は尋ねてきたいとのこたから兄の病院のドクトルを教へてくれた。内閣の連中が大根張を存置にもちこんだを川名君が何と云つたからして連中犬に憤慨してゐる。大したことでないか、かく騒ぎ立てるのは平生常態してゐる争氣の常なる所、頗る生理的承同かある。鶴殿もこの情勢のハゲ口として喧嘩にあり。平田先生へ手紙書く。先づ橋下氏へ提出せし手紙の概要報告、持の方上の依頼、海軍、陸軍の備置についての注意などを記す。

十二月五日(金)

晴。あつた来る。民子男子のれも似しく勉強中なり。橋本君が小倉刑務所を視察し、~~後防務局長中村成郎氏及び教導長保吉氏尺中~~この刑務所に二十一年余服役した佐々木君が視察の由、今日より始末へ行くと云ふ。持と別れ、空気を交はして由、現場より出て行つた。これは本件ハゲ、~~無期~~無期に二十一年と有りし有り。橋本君の兄の許に行き由。(昨年二月)の急病の間にさ















リ昨刊の解説、そのP20部分のP20の区違、陸民族の相違、外蒙の蒙羅語  
への序局、沿河州、北樺太、北樺太の呼称と化等を知る。

十二月二十日(土)

曇。雪を漸く強かりんとす。洗濯をせり、裁割りをせりしむ。喉痛  
物の押下は中、重んず。外蒙では草の押下をせりしむ。肉類  
下は食の山東菜の追加をせりしむ。又葱の押下もせりしむ。  
又。農産増強のため後人のためをせりしむ。又。農  
産増強のため、後人のためをせりしむ。

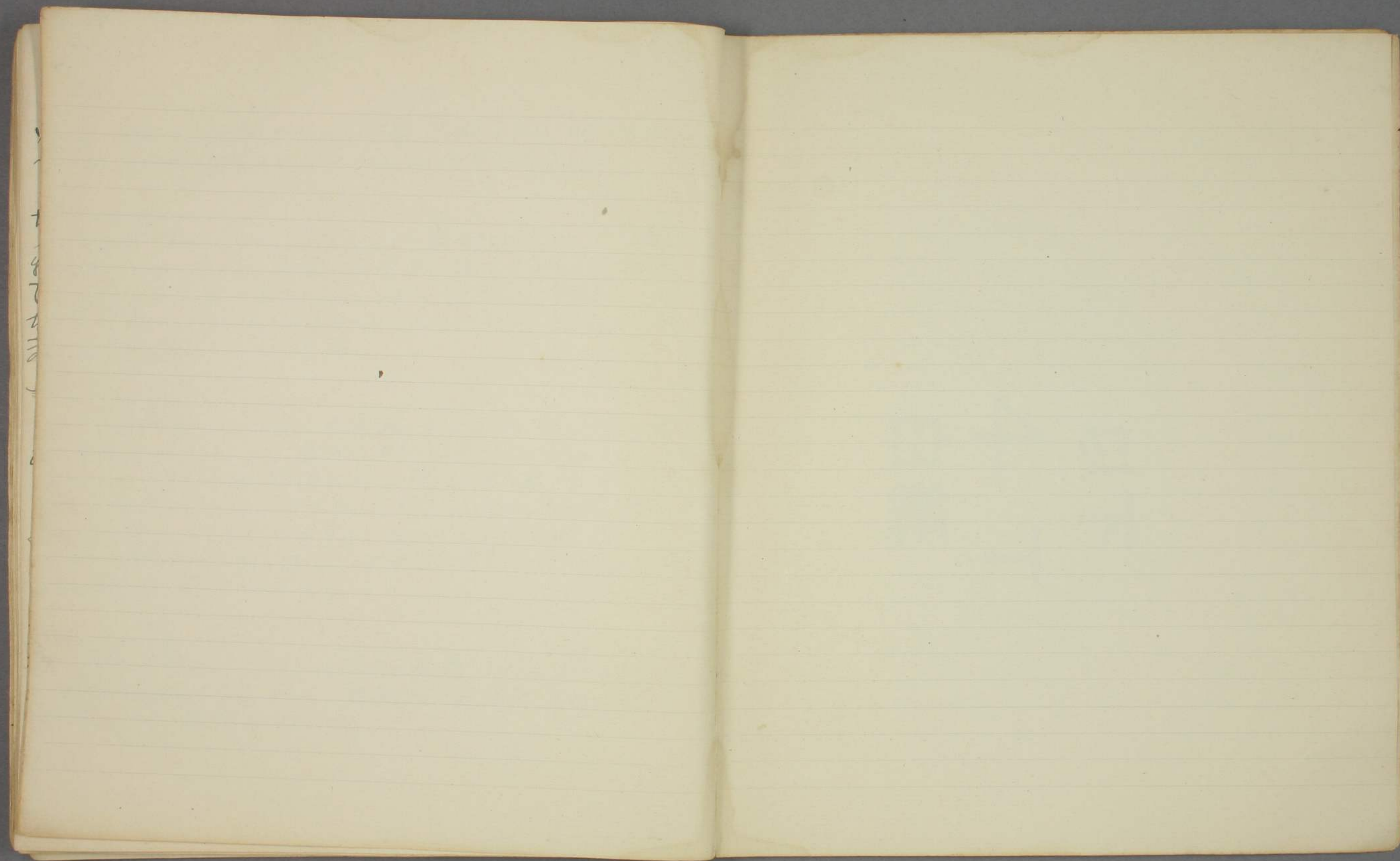
十二月二十一日(日)

曇。夕刻より雨ふりけいむ。東洋文化史大系序巻 八三三の巻  
承の裏邊を陰みけいむ。最初のマホ州の一章を叙す。ありは  
概して 十三世紀の 聖明時代の 陰み、更に再んで、オスマン  
トルコの 皇朝より マホ州の 北口 新巻を 陰み、  
向ふし。又、ついで、北口より、我が国に 向ふし。北口より、  
我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。  
我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。  
我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。

十二月二十二日(月)

雨。午後より 降る。八三三の巻の裏邊を陰。今、八三三の巻  
の解説 ~~及び~~ 及び、十三世紀の 北口 新巻を 陰み。我が  
国に 向ふし。我が国に 向ふし。我が国に 向ふし。







以下  
4 丁  
白紙



面会

七月 十月十日, [石在石中] = 十月十日

八月 十月十日, ~~十月十日~~

九月 十月十日

十月 十月十日, 九月

十一月 十月十日, 十月十日, 十月十日 -

案件

七月 十月十日, 十月十日: 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日

八月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日

九月 十月十日, 十月十日, 十月十日

十月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日

案件

七月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日

八月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日

九月 十月十日, 十月十日, 十月十日

十月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日

十一月 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日, 十月十日 - 十月十日





"BOOKMAN SERIES"

16 6 20  
14